

ボリビアから日本へクリスマスカードを届けてくださった ボランティアさんのレポートです

コロナ禍で三年ぶりの「聖マルティンの家」訪問、子供たちは私たちが忘れちゃったかなと思いながら、長い旅路の末到着した懐かしい顔ぶれが玄関まで出てきて歓迎してくれました。昭子さんをはじめ、カペデイスの子供たちも職員も、ここを訪れる人は誰でも歓迎の笑顔で出迎えてくれます。

これから2か月間、どんな時間を共に過ごそうかと、嬉しさでいっぱいです。着くや否や、ご支援者の皆様に感謝を込めて贈るクリスマスカードのデザインを頼まれ、時差ボケしている場合ではないかと早速取り掛かりました。子供たちと一緒に作ることが出来る愛情のこもったもの。段取り良く作業を進めないと数百枚のカードは期限までに出来上がらない。その日から毎日少し緊張しながら子供たちと職員が集中して作業が始まりました。

ハサミが得意な子は切る作業を、指が麻痺して上手く動かない子は、指に挟んだ竹ひごの先に糊を付けて糊付けを、また別な子には職員が手を添えるなどして、子供たちは自分の出来るやり方でビックリするほど作業に集中するのです。毎日毎日続く作業に、すぐ飽きるだろうと思ったのですが、作業をする教室に子供たちは自ら集まって作業の開始を待っているのです。細かい部分や、やりづらいパーツはただ見ているだけでなく、子供らが自ら自分の出来る事を考え、やっていくのです。子供たちのやる気に感心しました。ホセ、ホスエが特に熱心で、マリアルース、ロスメリー、マルガリータ、エレナが仕事の合間に意欲的に参加しました。

②

この子供たちのやる気は、長い間カペデイスで培ったものに違いないと思いました。昭子さんが目指す、身体や知能に大きな不自由を持っていても、その人なりに出来ることを最大限活かして、やろうとする気力を持つこと、まさにそれが現実のものとなっているのです。

10月から始まったクリスマスカード作りも11月上旬には終わり、その後は通っている学校の宿題や、ボール遊び、パズル、知育玩具などをして過ごしました。時には近くの公園に出掛け、碁盤目に小石を投げ込む遊びや、ブランコ、滑り台で遊んでおやつを食べます。ロサリアは知的障碍のため、他の子との関りや、グループ遊びが苦手ですが、この碁盤目遊びに誘ってみたら、順番を守ることを理解し、石の投げ方を学習し、調整出来ることを知った時の驚きと感激は忘れられません。その時からグループでボール投げ遊びも出来るまでになりました。

ホスエは電動車いすで園内を自由に動き回り、時には大きな声で泣いて自己主張し、ホセも怒りを大声で表し、言葉のない子は一生懸命周りの子供達や大人がわかってくれるまで感情表現します。ボランティアとしてカペデイスに住み込み、彼らの泣いたり笑ったり喧嘩したりする日々を目の当たりにして、知的・身体に障碍を持ちながらも現実に懸命に生きているのだと感じました。

しかし、この子たちを支える昭子さんの現実は、いつも厳しさにさらされています。エルピス会支援者の一人として皆様のカペデイスへのご支援を心から願います。皆で昭子さんと「聖マルティンの家」の子供たちを守ろうではありませんか。

--- 三上 敏子 様よりレポート頂きました。有難うございました。